九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

イメージ表象分析の試み ドンキホーテ，ルソー，タミヤン

阿尾，安泰
九州大学

https://doi.org/10.15017/10004

出版情報：Stella. 18, pp.61-82, 1999-06-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

イメージ表象分析の試み

――ドンキホーテ，ルソー，ダミヤン――

阿　尾　安　泰

ふたつの問題系から

ルソーの著作を前にして様々な語り方，アプローチが考えられよう。ここでその可能性のすべてをあげて論じることはできないが，事態を単純に図式化する危険をあえて冒すとすれば，少なくともふたつの大きな方向を指摘することができるだろう。ひとつは特定の作品を選び，その分析に主眼を置くミクロな読解ともいうべきものであり，もう一方はある主題系のもとに諸作品を横断的に検討していくマクロな読解と呼べるような作業である。

実際これまでの自分の試みを振り返っても，こうしたふたつの道があったように思われる。ミクロな読解とも言うべき試みでは，主として『演劇に関するダランベール氏への手紙』に照準を定め，成立のプロセスとコンテクストの分析を基に，著作の位置づけに努めてきた[1]。もうひとつのマクロな読解においては，テーマによるテクスト横断的な読みを行おうとした。今回そのふたつの問題系を問い返す中で，こうした試み同士の出会いを考えてみたい。

なぜ『演劇に関するダランベール氏への手紙』にそれほど拘ったかと言えば，作品が持つ境界を侵犯していく動きのためであった。その複雑性は演劇論という外観のもとに宗教問題を論じ，その一方で政治的課題をもテーマとして，共同体のあり方を考えるという所などに現われていた。また多面性は内容のレベルのみにとどまらない。テクストの受け手の問題，さらに伝達の相手を想定する言語行為の問題を提起する。ルソーは誰のために書くのか？ それは一見するほど簡単な問題ではない。この著作はダランベール氏の議論に対抗したジュネーブの立場からの反論を代表しているかに見える。ルソーもそうした言明をしているが，それがすべてではない。実際この作品はジュネーブの側から完全な満足を引きだすことに成功しない。それは論理戦略の拙劣さのためで

はなく，表明される立場の複雑さゆえのことである。ルソーの視点は単一的なものではなく，ジュネーブ，パリ双方を意識した複合的なものであり，両者の影響関係の中で引き裂かれている。この分裂はテクストの書き手たるルソー自身にも見られる。一体ルソーとは誰なのか？ 自明とも思える問いかけが新たなことを明らかにする。ルソーのディアスポラ性が現れてくるのである。このジュネーブ出身の男は放浪の果てにパリで名声を確かなものとした。定住とはほど遠い境遇において，彼は自分で思っているほどジュネーブ人ではないし，またパリ社会に同化しきっているわけではない。ルソーの持つ不確定性を読解の地平から消去するわけにはいかない。このように『演劇に関するダランベール氏への手紙』という著作は様々のレベルで揺らぎ，ずれを示しており，分析を通じてルソー作品の複雑な構造を明らかにする可能性を与えてくれる。

さてこうしたミクロな読解に対して想定されるマクロな読解とはいかなるものであろうか。それはルソーの著作にテーマを設定する作業から始まるとも言える。「ルソーの政治思想」，「ルソーの宗教観」，「ルソーと共同体」など様々な系列が考えられる。ただここでは，そうした主題系から離れてみたい。というのも「政治」，「宗教」，「共同体」といった概念が極めて明確な印象を与える反面，諸概念が生成されるコンテクスト自体の問いかけの契機を失わせる恐れが見られるからである。18 世紀における課題探求の前提と現在の分析条件との間にはずれが存在するはずであり，認識面の視差の意識を欠いては時代錯誤的な誤謬に陥ることになろう。

ここで選択したいのが，「逸脱」というテーマである。ルソーがいかなる点で人々の想定する基準からずれていったのかを考えてみる。ルソーの怪物性という問題である。しかし，それはすでに従来の研究テーマのひとつであり，少しも新しい印象を与えないように思える。実際ルソーの狂気なるものについては繰り返し語られてきたではないか。ルソーの才能を認めながらも，その性格面での異常性に言及するテキストは少なくなかった。異常性を 2 次的なものとして論じるものもあれば，その特異性と豊かな天性との関係を考察するものもあった。そうした様々なアプローチの仕方の可能性を示してきたものこそ，この狂気という主題ではなかっただろうか[2)]。

しかし，ここに問題点が存在する。狂気とは何か。その前提が問われていないことが，今「逸脱」というテーマで新たに考察を開始する理由に他ならな

い。従来のルソー論者たちは，異常性の成立を考えるというよりは，それをある程度自明の存在として処理し，論理体系における逸脱の整合的な位置づけの方に主たる努力を傾けてきたように思える。ただ「逸脱」とは極めて関係論的な概念であり，正常なるものとの連動において，記述されるしかない。「逸脱」そのものが存在するというよりも，ある規範の生成過程においてずれが不可避的に生成されてくるのである。「正当」な認識の枠組みが形成される時，その境界線上に必ず偏奇なものが出現する。そうであるからには，この異常性の探求は必然的に正当性の姿を問うこととなる。これまでのルソー論においては，規範的なるものが思索の対象となることは少なかったのではないだろうか。ルソーは異常である。では，それを判断する「正常なるもの」とは何なのか。裁かれるべき歪みを検出するのは，ある意味でそれほど難しくないのかもしれない。厄介なのは，偏差を図る目安としての標準的な認識の枠組みであり，それこそ最も顕在化しにくいものである。難しいといっても，枠組みが深遠なものだからではない。反対にその認知の方式が，人々にはごく当然に，極めて自然に思えるほどに意識化されていないからである。この「自然な」機構は決して非歴史的な存在ではないし，この認識構造の歴史的生成プロセスを考案しなければならない。そして正常，異常を隔てる境界線が不動ではなく，揺れ動くとき，「怪物的なもの」もその姿を変えていくことだろう。そうしたダイナミズムの分析に注目することが，「逸脱」というテーマに拘る所以である。

以上のような背景を踏まえた上で，こうしたふたつの読解が出会うことができるかどうかが本論の課題である。それはテクスト生成の分析が，そのコンテクストを形作る諸条件の検討を経て，ルソーという怪物を出現させる装置の構造にどれほどの光を当てられるのかという問いでもある。

1．他者ルソー

1－1．ドンキホーテとしてのルソー

『演劇に関するダランベール氏への手紙』の出版前にマルゼルブ氏から検閲を依頼されたサリー氏は，1758年9月21日付けのマルゼルブ宛の書簡で，自分の意見を述べながら，ルソーをドンキホーテと評している――

小生にとりまして実に奇妙に思われますのは，こうした百科全書の些細な項目に対

しましてルソーが熱を込めて，これほどの大部な書物を書き上げてしまうことであります。彼はドンキホーテのように風車しか無い所に巨人の姿を見たのです。とは言え，楽しく読ませていただきました。[3)]

百科全書の僅かな記事のために，このような著作を書き上げてしまうルソーのアンバランスが指摘されている。その見当違いがドンキホーテのようだと言う。風車を怪物と取り違える錯誤があるというわけである。ただこうしたバランスを説く「良識」的意見の存在もフランス的なコンテクストを前提とした上でのことであるのは確認しておかねばならない。この「些細な項目」のためにこそ，それが発表されるとすぐにジュネーブの聖職者たちはこぞって反駁するための活動に入ったのである。フランス側には些細な問題でも，ジュネーブにとっては重大なものとなる。そうした点からすれば，ルソーの「愚かしさ」に言及する見解のフランス的な姿勢も問題にされなければならないだろう。

百科全書が引き起こした問題はフランス，ジュネーブという異なる文化空間の衝突から考えなければ，その全体像がつかめない。フランスという国家，そしてそこで形成される文化という前提に無自覚な者にとっては，ルソーは常に常軌を逸した捉えがたい他者でありつづけるだろう。

1－2．ルソーとは誰か？

フランスという枠組みから逃れる他者たるルソーについて，絶えず認識の枠組みが当てはめられようとする。それは何とか自分の文化圏の中に，この理解しがたい者をとりこもうとする努力の現れに他ならない。ヴォルテールは尋ねる，「ルソーとは誰だ？」。彼にはルソーのすることが理解できない。『演劇に関するダランベール氏への手紙』を書いてジュネーブへの演劇導入に反対するルソーの真意がわからない。ヴォルテールはルソーのことを考える。なぜこの男はそんなことをするのだろう。自分がこれまでジュネーブに近いところに居を構えて行ってきたのは，演劇後進地域たるジュネーブの文化水準をあげることではなかっただろうか。そして時代の流れにも合った芸術活動はそれなりの成果を挙げてきている。それなのにルソーはどうして自分の努力に反対するようなことを，時代にも逆行するようなことをするのだろう。もはや昔とは違うのだ。宗教の権威の前に俳優たちが低い地位に甘んじたような時代ではない。

科学，文化の発展，進歩は旧時代の偏見を打破しようと努めているではないか。実際ルソーがその名声を得たのも，豊かな文化活動を背景にした上でのことではないか。啓蒙の時代の進歩的な動きを無視して，演劇を批判するのは自分への裏切りではないのか。そうした考えがヴォルテールの根底にある[4]。

ヴォルテールにはルソーが理解できない。というのもこの知識人には自分の思想の根底にあるフランス文化中心主義という前提を問うことが念頭にはないからである。彼が文化の普遍性を説いても，そこで問題となる主たる概念モデルがフランスに収斂する以上，それはフランス文化帝国主義の観を拭えない。ルソーは演劇一般を批判したのではない。そのモデルがコンテクストを無視して，あらゆる領野に際限なく適用されようとする事態を問題視したのである。逆に言えば，ヴォルテールにとっては，フランス，ジュネーブといった文化の舞台の違いはあまり考慮されない。彼の母国でうまく機能するのは，他で成功が約束されているという確信がある[5]。

こうした視点を問い返す契機がない限り，ルソーは絶えずおかしな者と映る。そしてその異常さの原因を，文化論的な次元ではなく，個人的な要因で考えようとする。つまり，「ルソーとはどんな人間か？」と問うことで，その個人的資質から事態を考えていこうとする。

1－3．ルソーの仮面

認識の枠組みにおけるずれは，様々な現象の記述をめぐる態度の違いといった形でも現れてくる。例えばヴァンセンヌの体験をめぐる語りに注目してみよう。ルソー自身は『告白』および『マルゼルブへの手紙』の中で以下のように語っている――

〔…〕ある日，「メルキュール・ド・フランス」誌を持って，歩きながら，目を通していると，ディジョンのアカデミーが翌年度の懸賞のために出しているつぎの問題にぶつかった，《学問と芸術との進歩は，風俗を頽廃させたか，純化させたか》。

これを読んだ瞬間，私はべつの世界を見，べつの人間になった。〔…〕このときのことで，はっきりと思いだすのは，ヴァンセンヌに着いたとき，うわごとの状態にも近いほど興奮していたことだけである。ディドロはそれに気づいた。私はわけを話した〔…〕。彼は，私のそういった思想をもっと飛躍発展させて，懸賞に応じるようにすすめた。[6]

当時，ヴァンセンヌに監禁されていたディドロに会いに行く途中のことでした。ポケットに「メルキュール・ド・フランス」誌を1冊入れておいたのを，道々ぱらぱらとめくりはじめました。ふと，ディジョンのアカデミーの課題が目にとまります。〔…〕もし，突然の霊感らしいもののこの世に存在したためしがあるとすれば，これを読んだとき私の心のなかで起こった動きこそがそれです。突如として私の精神は，おびただしい光に照らされ，目のくらむ思いでした。いききとした無数の考えが，同時に力強く，混沌として湧きあがってきて，私は名状しがたい興奮と混乱に陥っていました。[7)]

時期的に先立つ『マルゼルブへの手紙』においては，この特権的瞬間の記述の方に力点が置かれ，ディドロに関する言及は多くはないし，ディドロの働きかけに関する部分はない。ただどちらにおいても，中心はこの特権的瞬間であり，その体験の特異性，神秘性を強調する書き方において，友人ディドロの存在は2次的なものに思える[8)]。

こうした語りのスタイルはマルモンテルの『回想録』の語り方とは対照的である。マルモンテルはヴォルテールからルソーとはどんな人間かと聞かれて，自分の見解を述べていく。その際，ヴァンセンヌの体験に言及する。確かに彼は体験の重要性を示す『マルゼルブへの手紙』を引用するが，その意図は体験を別のコンテクストに移すためであるように思われる。彼の力点はむしろ後に彼が紹介するディドロの談話であるからだ。彼はディドロの話を引用する——

私〔ディドロ〕はヴァンセンヌに捕らわれていた。ルソーは私に会いに来ていた。彼の言うところでは，私は彼の良き相談相手なのだそうだ。ある日，2人で散歩していると，ルソーが口を開いて，ディジョンのアカデミーが面白い問題を出しているので，その問題に応募してみたいと言った。その問題は，「学問と芸術の進歩は風俗を純化させたか？」というものであった。「どんな立場を取るんだい」と私は彼に聞いてみた。「肯定的な立場さ」とルソーは答えた。そこで私は言った。「それは駄目だよ，仕様もない連中はみんなそう言うだろうし，君だってそんな立場じゃたいしたことも言うことはできないよ。そうじゃなくて反対の立場を取った方が，哲学的にも弁論の上でも新しくて実り豊かなことが言えるよ」。

ルソーは少し考えてから，「君の言うとおりだ。アドバイスに従おう」と言った。[9)]

この場面はルソーの述べる所と大きく異なっている。体験の特権性はディドロの描写では現れず，むしろディドロのアドバイスの方が全面に出てくる。そこ

で描かれるルソーなる人物は，決して変わった男ではなくて，平均的な人物であり，たまたまディドロのアドバイスに従って自分と違ったスタンスを取った者となる。その点ではルソーは理解できぬ他者ではない。その変わりに，自己を偽るものと位置づけられる。実際マルモンテルはディドロの談話を紹介した後で，総括するかのようにみずからの見解を述べている。「こうしてこの時からルソーの役割と仮面が決まったのです」[10]。つまりルソーとは自己を偽る者なのである。そしてそれを聞いたヴォルテールも同調する——

> ヴォルテールは言った，「そうだろう。この男は頭のてっぺんからつま先まで，嘘で固まっているのだ。心も精神もそうだ。いくらストア派や犬儒派を気取っても無駄なことだ。すぐに化けの皮がはがれ，偽りの仮面で息が詰まってしまうだろう」。[11]

本論ではどちらの見解が真相に近いのかは問題にしようとは思わない。真実なるものを求めて探索を続けるのではなく，このように異なる読解のコードが併存していることにまず注目しておこう。位置づけをめぐる衝突が存在している。それは他者に対する戦いと言ってもよいだろう。マルモンテルをはじめとする百科全書派たちの解釈戦略は，ルソーの異質性の除去を目指すものであった。一見すると不可解に見える行動も，実は本心を偽る動きであるとすることで，ルソーを自分たちの認識の圏内に回収することができると考えたのだ。彼の偽りの仮面がはがれれば，自分たちと同じ顔が現れるという筋立てであった。

明らかにルソーの提示するビジョンはこれとは反対に自己の独自性を主張するものであった。自己に課されてくる意味づけに対して，そうした限定に回収されない存在があることを示すことが求められていた。ルソーという人間はフランス的な，百科全書的なコンテクストでは理解不能の存在であることを明らかにするために彼のテクスト群が存在する。そうした試みの中で，自らを生地たるジュネーブに結びつけ，そこにアイデンティティ構築の基盤を見つけようとする動きも理解されるだろう。ただそこには複雑な状況が現出する。

1－4．ジュネーブから離れて

確かにルソーはジュネーブの生まれである。ただその後，各地を放浪した中

で自己形成していったこの思想家を，無媒介的にこの生地に結びつけるのには無理があるように思われる。もちろん百科全書の記事により，この都市の宗教的，文化的自立性が侵害されるのを恐れた人々が頼ったのはルソーであったし，またルソー自身その防衛を自己の切実な義務と考え，『演劇に関するダランベール氏への手紙』を執筆したことも事実である。そこからルソーとジュネーブとの密接な関係を指摘することもできよう。しかし親近性に注目するだけでは，事態の複雑さを取り逃がす恐れがある。というのもこのルソーの著作は完全な形では彼の支持者たちの期待に応えることはできなかったからである。ルソーはジュネーブに対してすら，他者なのである。

ルソーの描くビジョンはジュネーブの支持者たちのものとは微妙なずれを示している。もともとルソーがこの都市ジュネーブに抱くイメージも現在のジュネーブというよりも，彼が子供時代を過ごした都市に対する思い出を背景にして成立したものであり，過去の美化性において，この都市の現代性が忘却される恐れも少なくはない。実際ルソーは，ジュネーブが持つ発展的な工業都市という面については多くを語らない。むしろマルモンテルの方が『回想録』において産業活動に注目している。このように同じ「ジュネーブ」という表象においてはらまれた微妙なずれが事態を複雑なものにしていく。そしてルソーに対してはジュネーブを理想的に描きすぎているという批判も加えられていく[12)]。

ただ注意すべきは，支持者たちが留保するにしても，そのためにルソーから離反していくわけではないことである。戸惑いながらも『演劇に関するダランベール氏への手紙』の作者に対して好意的であると言える。ここで変化を起こしていくのはルソーなのである。ジュネーブに対し，以後自己の他者性を明らかにしていくのは，ルソーの方なのである。彼はこの自分の生地がもはや自分の想像していたような場所ではなく，他と同じく腐敗変質の流れの中にあることを確認したように思う。そしてそのような堕落の過程を見抜けなかった自分の認識の甘さを語るようになる。一度そうした考えにとらえられた彼には，周囲の意見は聞き入れられない。例えば腐敗はあるにしても僅かなものであり，取るに足りないものであるとか，すべてに悪化というレッテルを貼るのは画一的で現実的柔軟性を欠いているというジュネーブからの声もルソーの見解を改めるには至らないであろう。最終的には，ルソーは自分のジュネーブへの帰属を否認するような宣言を行うことだろう[13)]。このように関係を断ち切る形で，

自己の単独性を確認していくルソーの試みはいかなる地点に彼を導くのだろうか。その状況の果てに，ルソーの狂気というテーマが現れてくる。

2．狂者と王

2－1．陰謀

ルソーよりは後の世代に属することになるメルシエが語るルソーの姿を見てみよう――

> 私は，プラトリエール通りに，彼をたずねたことがある。そして『エミール』の著者を前にして，この著名な作家が脳の病に侵されているのを見たとき，どんなに深い苦悩に浸されたことか！ ルソーが幻の敵のこと，彼個人に対する万人の陰謀のことについて私に話すのを聞いたとき，私はため息がでた。〔…〕そう，ジャン＝ジャック・ルソーは，あまりにも強烈な想像力に動かされ，彼自身も自覚していなかった自尊心でいっぱいになっていたので，自分の周囲に巧妙な敵の同盟がはりめぐらされていると思いこんでいた。[14)]

メルシエはルソーの才能を高く評価しながらも，この思想家が取り返しのつかない妄想に陥っていることを嘆いている。実際ルソーの後期の作品，特に自伝的作品群には彼を取り巻く「陰謀」というビジョンが色濃く現れている。ここでこの妄想について深入りしようとは思わない。すでに様々なアプローチが示されてきている。いかなる病理学的モデルでその実態を説明するのか，あるいは「陰謀」は単なる妄想にすぎないのか，それともなんらかの実在性があるのかをめぐって数々の議論が行われてきた。本論はその研究を総括する場ではない。これまで論じられてきたルソーの狂気というテーマをそのまま繰り返そうという気はない。既に述べたように，従来の研究がルソーの異常さを出発点として問題を考えていくという点でほぼ一致していたことを考える時，べつの方向から問題の探究を考えてみたい。つまり正常さを前提にした上で，そこからの逸脱を想定していくのとは反対に，異常さの方から偏差を規定する正常性を問題にすることはできないだろうか。異常さから正常さの成立を問い返していくのである。

こうした観点から，今まで余り論じられてこなかったイメージに注目してみよう。それはルソーの妄想の中に現れてくるダミヤンの存在である。ダミヤン

とは1757年1月5日にルイ15世の暗殺を企てた人物であるが，もちろんルソーはそうした危険人物と直接の関係を持ったわけではない。『告白』の中でも，この事件の恐ろしさについて言及しているだけである[15]。しかし，彼の妄想体系の中ではこの暗殺者の存在が重要な鍵を握ることになる。ルソーに対して，「陰謀」に新たな手がかりを与えるのが，この暗殺未遂事件だからである。事の起こりは，ルソーが自分の原稿，書簡類の中での欠落の発見から始まる。『告白』の語るところによれば，問題の手紙とは，1756年の10月から1758年の3月に至る期間のものである[16]。その時期について考えをめぐらせるうちに，ルソーはある発見をしたと考える。別の断片にはもう少し具体的な形で陰謀の姿が描かれている——

> 〔…〕機械的にページをめくりながら，偶然ある空隙に気づいたのである。そのときまではあまり気にもとめていなかっただが，そのときは別の事情からその重大さ思い起こした。そしてその作者たちは，私が生贄となるべき恐ろしい陰謀という観念をはじめて私に知らせてくれたのであった。[17]

彼の言う陰謀はこの空白の時から逆算されてくる。その間に起こった重要な出来事こそ，ダミヤンによる国王暗殺未遂事件なのである。ルソーには人々が彼をこの犯罪者の共犯に仕立て上げようとしているように思えてくる。国王殺しの重罪人ルソーというイメージの成立とそのような表象を押しつけようとする秘密の計画に対し，ルソーは立ち向かおうとする。その謀略の中心人物は，フランス政治において当時大きな力を持っていたショワズールとされる。この重要人物にルソーが嫌疑をかけるのも，ルソーに対し下されたパスポートがルソーには不可解なものと思え，そうした手段も彼をダミアンの共犯者に仕立て上げる作戦のように考えられたからである。こうしてルソーに対する「陰謀」はダミアンという項を介して，フランス政界をも巻き込む壮大なものとなっていくのである[18]。

こうした思考過程を支離滅裂であると断じるために，ここでダミヤンの名を挙げたわけではない。王の暗殺者が妄想体系の重要な点を占めるという事態に注目したいのである。なぜこの人物にルソーは重きを置くのだろうか。いかなる衝撃をこの犯罪者は投げかけているのだろうか。そのように重要性を与えるのは，ルソーだけなのだろうか。ルソーの異常性を論じるために，彼の精神病

理学的アプローチに乗り出すのではなく，このダミヤンなる人物が当時の人々にいかなる影響を及ぼしたのか，少し迂回をしながら問題を考えてみたい。

2－2．王殺し

ここで再びメルシエを典拠としながら，ダミヤンについて彼の語る所に耳を傾けてみよう。彼はこの事件の重要性を強調する。というのも，殺害の対象となるのが，国王だからである。ここにおいて王権の問題が現れてくる。そしてメルシエは興味深いエピソードを紹介している――

> 〔…〕ある若い外科医がもぐりこんで，この王殺しを貪るように眺めていたが，ダミヤンのほうもその外科医の視線に気づいて，「あいつを逮捕してくれ」と言った。若い外科医は逮捕された。ダミヤンは，彼の好奇心を罰するために，ただ恐がらせようとしただけだ，と言ったが，その若者の心の中の恐怖心が激し過ぎたために，恐怖のあまり死んでしまった。[19]

王殺しを企てたものは，その行為の大きさ故に，君主と並ぶ力を得るかのようだ。実際メルシエもこの犯人のことを「君主に向かってあえて手を下しただけに，まるで鎖につながれた君主といった扱いだった」[20] と述べている。ここで確認しておこう。君主とは単なる人間ではありえない。カントーロヴィチを引くまでもなく[21]，王は起源からふたつの身体を持つべく定められていた。彼は生身の私的身体だけではなく，国家を体現すべく，象徴的な身体を持たねばならない。そうした特異性を持つからこそ，王は様々な儀式を執り行うことができる。例えば入市式なども，都市に入るという具体的所作が象徴的レベルで人々に理解され，王の及ぼす権力関係を明確な形で規定していく。儀式はそこに参加できる階層とそれを眺めるだけの人々との間に明確な境界線を引き，その分割の上に成立する組織の存在を確認する契機となる。中心にいる者が王なのである。言ってみれば，王とは人々が自らの属す秩序を追認することで思考の枠組みを規定する準拠点なのである。王とは力を持つ者である。実際，古代の王は超自然的な力の体現者とされ，病気などを癒すことができると考えられた。その点から言えば，ダミヤンの視線の力で死に至る外科医のエピソードには，この古代的な呪術的な王の姿を見る気がする。

ただ近代へと至る過程においては，王はそうした魔術的色彩を脱却して，そ

の力を象徴的次元の方へと転移させていったこともここで思い起こしておこう。魔術的な力を近代的な権力機構の中にいかに組み入れていくかが大きな問題であった。ルイ 14 世から成立してくる絶対王政の課題もそこにあったと言える。特に 17 世紀あたりから問題になってくる対立し合うふたつの世界，つまり中世から連続している封建的世界と新たに登場し始めている市場経済世界の間に安定した関係を作り出さねばならなかったのである。ここで 17 世紀以降の王権の展開を簡単に振り返っておこう。

2－3．王・機械

アポストリデスによれば，この歴史過程においてなされたことは，王の象徴的身体の強化であった。はじめのうちは，積極的に儀式のイニシアティブを取っていたルイ 14 世も 1670 年代後半には，その前面に出ることが少なくなってくる[22]。当初は私的な身体が重視され，王の現前によって，典礼の重要性を確保していったのであるが，式典の様式が確立されていくうちに，実際に王の姿がなくても，儀礼が可能となっていったのである。王が不在でも，王を表象するものがあれば，十分に機能が達成されるようになった。こうして王の身体の想像的なレベルが確立されていくうちに，現実的な身体の方は制度，機構の中から消えていく。各組織は，王の名を語ることで，自動的に職務を果たしていくのである。王とは，こうした連動体系に与えられる名にすぎなくなる。こうして諸制度を円滑に運営していく機械操縦者としての王は，その高度な象徴化の達成の中で自らの私的身体の存在を希薄化していき，制度と一体化した機械のような存在となるのである[23]。

こうした状況を踏まえながら，新たに啓蒙思想が生まれていく 18 世紀を考えていこう。当初は人気のあった，ルイ 15 世も次第に臣民たちの支持を失っていく。特に高等法院をはじめとする王権に批判的な勢力との関係が大きな問題となる。確かに 1774 年に王が病いに倒れた時は，国中から幅広い同情と憐れみの心が王に寄せられたが，以後この君主は臣民たちを引き寄せることはできなくなる。外交的，政治的に様々な理由があるにせよ，また啓蒙思想をはじめとする新思想の流行もあるにせよ，人々は以前とは異なる視点で王を見るようになったのである[24]。

こうした中でダミヤン事件が起こる。ここにおいて王は再び人々の関心を引

くようになる。王に対する同情心がかき立てられ，王権のオーラ性がつかの間よみがえったかのようである。生身の王の身体というものが，生々しい形で政治の中に立ち現れた。傷つけられた王の肉体の表象が人々の意識の中で，王権の問題をリアルな形で突きつけてくるのである。逆に言えば，その流された王の血というイメージが人々と王との関係を一時的に活性化するとも言える[25]。ここでルソーに関連して問題にしたいのは，そうした時に現れてくるコミュニケーションの問題である。ダミヤンにここで言及するのも，その事件の政治的理由を考察するためではなく，彼が王と人民との関係のありかたのひとつのモデルを提供しているように思えるからである。

2－4．王の視線

ダミヤンの目的は王殺しではなく，王への警告であったとも言われている[26]。彼は王と対話の関係を持ちたかったのである。アンシャン・レジーム下において，人民は王といかなる形のコミュニケーションを持てるのだろうか。その交流にはしばしば暴力が伴うことを指摘したのは先に引いたアポストリデスである。彼はその例として，17 世紀の日記に載ったあるエピソードを紹介する。長くなるが引用してみよう――

> ヴェルサイユの劇場の機械仕掛けで働いていた息子が仕事の最中に落下して死んだ。特別裁判所で非難された母親は，悲しみのあまり，国王の注意を惹こうとして，白紙の請願書を提出した。効果があって，国王はお笑いになりながら，何が望みなのかを聞きただされた。すると，女は国王を売春婦と寝る男だの，機械を操る王だの〔…〕たわ言を吐いたので，国王はびっくりなされ，自分のことを言っているのか，と尋ねられた。女はそうだと答え，話し続けた。女は捕らえられ，すぐに鞭打ちの刑に処せられ，精神病院に連れていかれた。鞭打ちの刑は，全く容赦なく，サン＝ジェルマンの町でおこなわれた。女は一言も口にせず，痛みを，まるで殉教者のように，そして神への愛のためででもあるかのように，じっと耐えていた。[27]

アポステリデスは民衆が王権と遭遇する際の暴力性の例として，このエピソードを挙げている。王と接近したこの女は，最終的には刑罰を受け，精神病院へと収容される。しかし，彼女はそうした代償と引き替えに王との会見に成功したとも言える。では，なぜそれほど王との会見に拘るのだろうか。それは王が

すべてを見通すものだからであるし，少なくともそうであらねばならないからである。

王とはすべてを見抜く目を持つ者である。17世紀の臣民たちは，そのことを感じていた。視線の帝国主義である。君主は臣下たちの心を見通すことができるが，それは彼らがそうすることを許すからではなく，既に超能力がこの権力者には具わっているためである[28]。王は延臣たちのあらゆることを読みとることが可能であり，彼らとしてはそのまなざしを逃れる術はないという。逆に言えば，たとえ白紙であろうと王はそこに真理を読みとれるはずだということになる。このエピソードの女性も王のまなざしの完全性を前提とした上で，伝達回路を開こうとしたと言える。またダミヤンの場合も，完全たるべき王の存在がその水準に達していないという状況を読みとり，警告を発すべく犯行に及んだとも言われる。事件が示そうとしたのは完璧たるべき君主へのメッセージなのである。人々もダミヤンの行為に何らかの主張を読みとろうとする[29]。取るに足りない民衆の命を賭けた言葉であり，暴力的なコミュニケーションとも言える。そのメッセージに対してダミヤンは，過酷な刑罰という返答を受ける。両者に共通して言えるのは，出発点に王権の権力性という問題意識があるということである。ここで再びルソーに戻ってみよう。

3．ルソーに戻って

3－1．共犯者ルソー

ルソーは自分がルイ15世暗殺未遂事件首謀者ダミヤンの共犯者とされることを恐れている。そして自分をそのように仕立て上げる卑劣な計画，そしてそれを遂行する大がかりな組織の存在を白日の下に晒し，断罪しようとしている[30]。なぜルソーはダミヤンのことにこれほど拘るのだろうか。それはこの犯罪者のうちに，少なくとも彼の行為が喚起する表象にルソー自身が反応するところがあったためではないだろうか。共犯者ルソー，それは現実のレベルでは全くありえないことのように思えるが，イメージのレベルでは構造的に通底しうるのではないだろうか。政治的理由，社会的要因から行なう事件分析を離れ，コミュニケーションのタイプとしての類似性の視点から問題を考えていこう[31]。

ルソーの晩年においては孤立化が進行していく。彼が自らを律するために引

いていく自己と他を隔てる境界線作りの作業は，ますます人々との断絶の度合いを強めていく。百科全書派との別れ，サロンに集う人々との別離，そしてジュネーブとの絶縁，そうした分離は，自己の立場の徹底化の中で必然的に現れる行為の帰結であった。ただ強調しておかねばならないのは，孤立化はそれだけで完結するものではなく，同時に交流への願望を潜在的に増大させるということである。ルソーは孤独であると同時に，激しく結び合うことを求めている。伝達の回路は決して閉じられることはなく，むしろ屈折した形で肥大化していった。屈曲した形態は先に引いた白紙の手紙を王に出した女性のように，白紙の手紙を求めるルソーの態度にも現れている。彼はドゥドト伯爵夫人宛の1758年1月15日の手紙で次のように書いている――

> あなたのお便りについて落ち着いていられるように，1週間ごとに白紙を1枚郵便で出してください。そうすれば宛名書きのところにあなたの筆跡をみることができますし，あなたの封印だけで，私は満足で，手紙のなかには書かれていないあらゆることを考えます。[32)]

白紙の中からあらゆることを考えるというルソーは，その不在性から豊かさを引き出しうるかのようである。そしてこうした伝達が安定性を持ちうるとすれば，読みとる側の方に優れた解読可能性がなければならないだろう。読みとるまなざしの完全性を前提とし，そこに成立する伝達回路をルソーは夢想する。この純粋な回路こそ孤立化の中から志向されていくものに他ならないだろう。しかし，透明なすべてを見通すようなまなざしとは，その特権性において，これまでのコンテクストから考えれば．王が体現する視線を思い起こさせるであろう。その時ルソーの読解の中に王のイメージが現れてくる。完全なコミュニケーションの担い手としての王を想定する。そして回路の完全性を志向するとき，ルソーは王に向かって語ろうとするだろう。王を相手とする時点で，表象のレベルでその特権的対象を想定することで，彼はダミヤンと同じ地平に立つことになる。その点ではルソーはダミヤンと共犯となるだろう。

3－2．読者としての王

王を相手に選び取ることは，ルソーの著作において根拠のないことではない。実際ルソーは王を理想的読者と指定し，著作を捧げようとする。単独者た

る存在の徹底化，交流願望の潜在化の中でルソーが直面するのは「陰謀」という概念である。その不可知とも見える構造探求の試みの中で『対話』を書き上げるが，その中の「さきの著作のてんまつ」において自分の著作の運命について，以下のように語っている――

> 国王の眼に届くことこそ，私に望みうるかぎりもっとも有利な事態で，それはほかのどんな行動によってもけっしてもたらされないものであった。[33)]

ルソーにとって王はルソーを取り巻く不可解な「陰謀」を見抜いてくれる特権的な存在なのであった。そうした能力をもとに，伝達回路を開いて行こうとする点でルソーもダミヤンも同列にいることになろう。ルソーがダミヤンのことに拘るのもそれほど不思議なことではないように思えてくる。王権の絶対性に働きかけることで，事態の変革を図るという図式は，ダミヤン事件を読み解く側の共通の解釈コードではなかっただろうか。実際ダミヤンの行為がいかなる意図のもとに計画されたのかを巡って，綿密な捜査が行われたのであった。彼の背後に何らかの組織が存在するのかどうかが取り調べられていった。事件はメッセージを巡っての解釈行為となるのである。王権はこうした問いかけが行われる場を提供することになる[34)]。

王権が発動するこうした解釈の装置をルソーも利用する。自己の悪しきイメージ，虚像を国王が体現する透明なまなざしによって，霧散させてしまうことが彼の目的である。ただ，そうしたルソーのイメージ戦略とダミヤンの実際の行動が認識論的には同じ前提を共有していることを言っても，事態はそれで尽きるわけではない。再び問おう。なぜダミヤンなのか？ 王に犯行を企てた者はダミヤンだけではない。王をその手に掛けた者の名は，数々挙げることができる。実際アンリ四世はラヴァイヤックにその命を奪われている。では，どうしてラヴァイヤックではなく，ダミヤンなのだろうか。ここで問題にしたいのは，歴史的なコンテクストである。王権に対する働きかけという点では，同じに思えるものが，対象となる権力の構造とそれを捉える認識の在り方において違いが現われるのである。

実際ルソーにしてみても，王権のまなざしの全能性に期待しながらも，その試みについて時間的距離を置いた後では，「私の原稿が直接国王に届き，あの

若き君主が自分からわざわざこの長い著作を読まれるという考えはなるほど狂気の沙汰」[35] であると述べているのである。では，ここでルソーにおける狂気と正気の併存性を論じるべきなのだろうか。そうした可能性もあることを認めながら，ここでは別の道を辿ろうと思う。むしろ王権に対する意識の揺らぎを考えてみたいのである。

3－3．揺らぐ幻想

ダミヤンの処刑の細密な描写から初めて，18 世紀以降展開されていく権力の変貌について明快な形で論じたのは，ミシェル・フーコーであった。彼は，身体刑が重要性を失っていく中で成立する近代支配権力の姿を描こうとした。ここでその精緻な権力論についてふれることはしない。ただフーコーが提起した問題意識の中からルソーを捉え，これまでとは異なる意識の現れを考えてみよう[36]。古い認識の枠とのずれについては，メルシエの語る所を見てみよう。彼は，ダミヤンの事件をその前のラヴァイヤックの事件と比べながら，この両者を重ね合わせることで，そこに差異を読み込もうとしているように思われる――

> この犯罪者〔ダミヤン〕に科せられる死刑の種類ははっきり決まっていた。裁判官はただラヴァイヤックに対して行われた判決を繰り返すだけでよかった。君主は死なかったけれども，刑罰は少しも和らげられなかったところをみると，この犯罪はきっともっとも大きなものであるに違いない。
>
> 処刑の当日，国じゅうが好奇心に駆られて，この世にもまれな拷問を見物しようとやっきになった。〔…〕犯人が，もっとも長時間，この上なく残酷な刑罰によって，大罪をあがなっているその広場から，あわれみと同情は消え去っていた。その話を読めば，後世の人々は慄然とするだろう，それほどひどいものだった。
>
> 人々がこういうひどいことを我々の習俗や哲学とつじつまがあうように説明しようと苦労する日が，そのうち来るかもしれない。だが古い法律の命じるところによれば，おなじ責苦が繰り返されなければならないのであり，また高等法院は 1610 年に下された判決を何ひとつ変更しなかったのである。[37]

ダミヤンに対してラヴァイヤックと同じ残酷な刑罰が行使されることに批判的なメルシエの姿勢を指摘することができるだろう。もはや時代はアンリ四世の頃とは違っている。王権に対する態度に揺らぎが生まれている。王に向かう視

線は，王権を支える基盤を見いだそうとして，王の身体性に，オーラ性を帯びた身体に落ち着くというよりも，身体から象徴的に構成されていく制度の方に帰着するかのようである。王の肉体が問題なのであれば，その損壊に対し，厳罰をもって臨む身体刑は十分説得力を持ちうるはずである。しかし問われていくのが，身体が象徴的に形作る政治体制であるならば，その体系上の整合性を問題にしなければならないだろう。機構面の一貫性の観点からメルシエは厳密な空間分割を要求する。祝祭の時の花火に関する彼の記述を見てみよう——

> この花火の打ち上げのために，グレーヴ広場が選ばれたということ，そしてラヴァイヤックやダミヤンを四っ裂きの刑にしたおなじ敷石の上に，国王の肖像が麗々しく揚げられるなどということは，まったく不可解である。公衆の歓喜の象徴が，どうして車裂きや火焙りの後を継ぎうるのだろう。[38)]

身体損壊の儀式的重要性が認識されればこそ，特権的場所として同じ広場で刑罰も祝宴も挙行しうるであろう。実際中世的世界観はそうしたビジョンを否定しはしなかった。だがその多極的な見解はもはやメルシエには支持しがたいものと映った。近代的な政治支配機構の認識につながるものが生まれてきたとも思われる。ダミヤン事件の描写を通じて窺われるのは，新たな意識と従来の意識との重なり合いが生み出す複雑な揺らぎと言えるだろう。こうした複雑性を踏まえた上で，ルソーに戻ってみよう。

ダミヤン事件は王の存在を問題にする。では，ルソーにとって王とは何だろう。王を特権的まなざしの具現者として見ていることは，これまでも述べた。とはいえ，それに尽きるものではない。王へのイメージを自己批判もしているからである。彼はそうした表象に依拠しながら，同時にそれを批判的な眼で眺めている。この二重性はメルシエの視点とも類似している。では王とは何者だろうか。それは現実だけではなく，虚構のレベルまでも含む複合的な存在である。ここで『演劇に関するダランベール氏への手紙』においてルソーが行った転回点を確認しておこう。その著作において演劇批判およびジュネーブにおける劇場建設の有害性を説いてきたルソーが最終的には，共和国にとって必要なものとして演劇を挙げるのである。もちろんそこではあくまでもルソーが理想とする演劇の姿が描かれるわけであるが，その展開には驚かされる。なぜ演劇

なのだろうか。

演劇とは統合の契機を与えるものであった。17世紀における演劇が文学的・美学的な次元にとどまらず，政治的・教育的な効果もあげうるものであることを論じたのは，すでに名を挙げたアポステリデスであった。彼は中世的世界観に変わるものを人々に教えるものとして，古典演劇の果たした役割を強調した。そこでは王は世界観の対立を乗り越える英雄として描かれていった。従来の封建的な世界と生まれつつある交換の支配する商業的世界との葛藤を調停し，秩序を生み出す責任が王にはあった。舞台に登場するこの主人公は描かれた虚構の存在であると同時に現実の君主の姿を象徴的に表すものと捉えられた。人々はこうした虚構の教育装置を通じて理解を深め，統治機構の方も整備されていった[39]。

ルイ14世の絶対王政の確立もこの訓育装置と無縁ではない。王権の絶対性を確固たるものにしようとして，その基盤を宗教的次元から移行することを目指すとき，いかなる道を取るべきだろうか。そうした課題への解答の試みのひとつが，演劇の上演による人々への働きかけであった。実際，イメージ表象形成作業を通じて王権の象徴化のプロセスは整備され，ルイ14世の肉体を介しての直接統治から王権の象徴性に基づいた制度体系による管理の方に移っていく。確かに国王が儀式に直接介入していく度合いは減少していく。

そして王政の問題が順調に処理されていくかに見えた中で，成立した事件がダミヤン事件なのである。それはイメージ生成の作業がはらむ複雑性を示している。演劇を巡る象徴形成のプロセスは別の次元へずれてきており，その偏差をこの事件は間接的に表している。それゆえにルソーはこの事件に反応するのである。ダミヤンは王の暗殺に失敗する。そしてルソーもまた王に自分の原稿を託すという企てに失敗する。両者はその試みの挫折において通底しあう。

では，この失敗は何を明かすのだろうか。それは王という記号の揺れを，表象生成過程の変動を表している。確かにダミヤン事件は王という存在に対する問題提起であった。そしてルソーの場合も，王という存在への働きかけというテーマは共通であったが，彼の場合は，演劇というパラメーターが議論の新たな次元を開いてくれる。17世紀から発達していく演劇は，その発達のプロセスの中で，問題を新たなレベルで開いていく。演劇の受容を通じての教育というプログラムの中で，その伝達過程そのものが変容していくようになる。情報

の伝達される場が拡大していく。演劇に関する議論は次第にその宗教的なコンテクストから離れて，受容の効率化，教育の徹底化の中で，社会的な見地から問われ行くようになるのである。演劇が社会の中でいかなる有効性を持つかが問題となる。そうした外部的な拡大ともに，内部的な掘り下げ作業も行われる。演劇が及ぼす感情についての問いである。演劇が喚起する情念は真実のものと言えるのか。またそれを演じる俳優たちの内面はいかなるものか。ここにおいて，各主体における分裂の問題が現れてくる。分裂は見るものと見られるものの間にも存在する。また演じるものの内部にも，そして観客の内部にも現れてくる可能性がある。自己の問題が自己ならざる者との関係で想定される可能性が生まれるのである。演劇はその過程において，分断の契機をはらんでいくようになる。ルソーは絶えず自己の揺らぎを意識していたし，変身願望が自分にあることも表明している。そして『対話』においてはルソーは自己を二つの主体に分けて論証を試みたではなかっただろうか。さらに，ディドロが演技者における演技の虚構性を論じたのもこの時代のことである。

演劇が政治的意図をはらみながら，その活動を展開していく中で，分裂の契機を現出させてしまうことが，ダミヤン事件および妄想と対抗しながら書かれた『対話』におけるルソーの試みが明らかにすることである。それはどちらもこの18世紀の時代における表象形成のメカニスムのある面を明らかにしてくれる。ただそれは多面的な活動を見せる18世紀の一面でしかない。我々としては，このルソーという「狂者」の言葉のすべてを汲みつくしたわけではない。彼の「妄想」の中で繰り返される毒殺のテーマ，そして生きたまま埋葬される恐怖について，彼の時代におけるコンテクストで考えねばならない。しかし，それは別稿で述べられるべきことだろう。この「陰謀」との対話は今後とも続けられることを求めている。

註

1）特に以下の拙論を参照――「ジャン＝ジャック・ルソー論」，『独仏文学研究』第39号，九州大学独仏文学研究会，1989年8月，1-51頁；「18世紀の権力空間論――『演劇に関するダランベール氏への手紙』をめぐって――」，『ステラ』第17号，九州大学フランス語フランス文学研究会，1998年6月，65-88頁。

2）ルソーの狂気に関する研究はすでに数多くのものがあるが，特に最近のものとして以下が挙げられる——Claude WAEJMAN, *Les jugements de la critique sur la «folie» de J.-J. Rousseau : représentations et interprétations 1760-1990*, Oxford : Voltaire Foundation, coll. «Studies on Voltaire and the eighteenth century», vol. 337, 1996.

3）Jean-Jacques ROUSSEAU, *Correspondance complète*, éd. R. A. LEIGH, Genève : Droz, 51 vol. parus (sur 52), tome V [1967], p. 154.

4）ヴォルテールのルソー観については以下を参照——Henri GOUHIER, *Rousseau et Voltaire. Portrait dans deux miroirs*, Paris : Vrin, 1983. 特にルソーの裏切りについては137頁を参照。また18世紀における俳優に関しては以下を参照——Marianne BÉTHERY, «Le petit monde des Comédiens dans l'univers romanesque du XVIIIe siècle», in *Micro-sociétés du XVIIIe siècle*, Clermont-Ferrand : Groupe Interdisciplinaire du XVIIIe siècle, 1993, pp. 55-90 ; Maria Ines ALKIVERTI, *La naissance de l'acteur moderne*, Paris : Gallimard, 1998.

5）ただこうした文化主義が，非寛容な態度を批判する攻撃的知性とともに両立したことは強調しておかねばならない。実際ヴォルテールはカラス事件をはじめとする数々の事件に介入していく。こうした活動については以下を参照——石井三記『18世紀フランスの法と正義』，名古屋大学出版会，1999年。

6）ルソー『告白録』，新潮文庫，1958年，184-185頁。

7）『マルゼルブへの手紙』，白水社版『ルソー全集』（以下『全集』），1981-1984年，第2巻収載，472頁。

8）ただディドロに関するイメージは以後変化していく。晩年のイメージについては，1770年2月26日付のサン＝ジェルマン宛書簡（『全集』第14巻，477頁）を参照。

9）MARMONTEL, *Mémoires*, Paris : Librairie des Bibliophiles, 3 vol., 1861, tome II, p. 189.

10）*Idem*.

11）*Ibid*., p. 190.

12）*Ibid*., pp. 187-188. ルソーとジュネーヴについては，プレイアッド版全集第5巻の以下の註も参照のこと——*Œuvres complètes de Jean-Jacques Rousseau*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 5 vol., tome V [1995], p. 85, n. 7 et p. 88, n. 3. とくにルソーが強調したセルクルへの批判については *Correspondance complète*, op. cit., tome V, pp. 268-269 の付録資料を参照。

13）GOUHIER, *op. cit*., p. 144.

14）メルシエ『18世紀パリ生活誌』，岩波書店，1989年，下巻141頁。

15）『全集』第2巻，51頁。

16）『全集』第2巻，236-237頁。

17）『全集』第3巻，409頁。

18）ルソーにおける「陰謀」については，*Œuvres complètes de Jean-Jacques Rous-*

seau, op. cit., tome I [1959], p. 608, n. 2 ; p. 1177, n. 1 ; p. 1179, n. 1 の他に下記を参照——Pierre-Paul CLÉMENT, *Jean-Jacques Rousseau. De l'éros glorieux*, Neuchâtel : À la Baconnière, 1976, p. 337 ; l'article «Complot», in *Dictionnaire de Jean-Jacques Rousseau*, Paris : Honoré Champion, 1996, pp. 149–151.

19) メルシエ前掲書，298 頁。

20) 同上。

21) エルンスト・H・カントーロヴィチ『王の二つの身体』，平凡社，1992 年。また王権の問題については下記を参照——渡辺節夫「ヨーロッパにおける国王祭祀と聖性」，『王権のコスモロジー』，弘文堂，1998 年，259–281 頁；長谷川輝夫・大久保桂子・土肥恒之『ヨーロッパ近世の開花』，中央公論社，1997 年；柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦編『フランス史 2』，山川出版，1996 年（特に第 6 章）。

22) J-M・アポストリデス『機械としての王』，みすず書房，1996 年，168 頁。

23) 同上，201 頁。

24) Jean VIGUERIE, *Histoire et dictionnaire du temps des Lumières*, Paris : Robert Laffont, 1995, pp. 194–195.

25) ただこの事件も決して王権反対派の勢いを止めるには至らなかった（voir *ibid.*, p. 196）。またダミヤン事件については下記を参照——Dale K. VAN KLEY, *The Damiens Affair*, Princeton, N.J. : Princeton University Press, 1984.

26) VIGUERIE, *op. cit.*, p. 196.

27) アポストリデス前掲書，2 頁。

28) 同上，54 頁。

29) VIGUERIE, *op. cit.*, pp. 195–196 およびメルシエ前掲書，下巻 297 頁。

30) ルソーの晩年の自伝作品群の成立には，こうした意図が働いたことは否定できない。またそこに描かれるイメージ群と重なるような構成を取っている書簡としては，特に 1770 年 2 月 26 日と同年 11 月 23 日のものが挙げられよう。

31) VAN KLEY, *op. cit.* はこの事件を総合的視野の下に分析することを目指したものである。

32)『全集』第 13 巻，427–428 頁。

33)『全集』第 3 巻，338 頁。

34) メルシエ前掲書，下巻 297 頁。

35)『全集』第 3 巻，341 頁。

36) ミシェル・フーコー『監視と懲罰』，新潮社，1977 年。特に権力の変容については，69–71 頁を参照。

37) メルシエ前掲書，下巻 298–299 頁。

38) 同上，上巻 419 頁。

39) アポストリデス前掲書の他に，同著者による下記を参照——『犠牲に供された君主』，平凡社，1997 年。